

# 今世紀最大の天体ショーを 地域のみんなで成功へ

## 「皆既日食」を通じた地域貢献への取り組み

### 鹿児島県喜界町商工会女性部

昨年夏、日本中が「黒い太陽」の出現に沸いたのは記憶に新しい。今世紀最長の6分半にもわたる皆既時間が予想され、46年ぶりに国内の陸地で皆既日食が観測できるとあって、喜界島にも、国内外から約1500人も、見物客が詰めかけた。この天文ショーを成功させようと力を発揮したのが、喜界町商工会女性部だ。地域一体となった取り組みを報告する。

喜界島は鹿児島と沖縄の間にあり、鹿児島本土から飛行機だと1時間、船だと12時間かかります。奄美大島本島の東、東経130度線上にポツンと浮かぶ人口8200人、周囲約50km、車で約1時間で一周できる小さな島です。さとうきびが中心の農業の島ですが、自ごまの生産量は喜界島が日本一です。

さて、この小さな喜界島に昨年大きな波が押し寄せてきました。今世紀最大の天体ショー、皆既日食が平成21年7月22日に起こり、喜界島にも3分間

の感動を求めて全国から多くの観光客が訪れることになったのです。

ところが、島ではなかなかこの皆既日食へ向けての取り組みが盛り上がり、皆既日食5ヵ月前の2月になっても、観光客にどのように対応すればいいか準備がほとんどできていないような状態でした。

そこで立ち上がったのが商工会女性部です。島には「明日を担う女性の集い」という会があり、商工会女性部を



観光客に島唄を披露する豊島女性部部长

含む町内6団体が加盟して活動しています。その組織を利用し、商工会女性部が中心となって、まずは島に住んでいる人々から皆既日食への意識を高めたいこうということになりました。島の人々が皆既日食の意義を理解できなければ、観光客に対する配慮、もてな



女性部の提案で無料配布された「観測メガネ」で空を見上げる児童たち

しの心は生まれないからです。  
**地域振興への足がかりと子どもたちの育成のために**

まずは、「喜界島での皆既日食の見方と環境保全について」と題した講演会を企画しました。商工会女性部では、鹿児島県環境アドバイザーの派遣を依頼。「明日を担う女性の集い」の6団

体が協力し、昨年の5月10日に実現しました。当日は130名余りの人々が参加し、「時宜を得たすばらしい講演会だ」と地元新聞にも掲載され、高い評価を受けました。参加者の方々は、皆既日食の意義を知り、女性の力による地域おこしのあり方を再認識することができました。

この講演会の中で部員たちの心に残ったのは、「皆既日食を一つのイベントにせず、地域振興への足がかりとすることが大切である」ということと、「子どもたちの育成に役立たせるため、感動を記録に残してほしい」ということでした。

そこで、商工会女性部は、子どもたちのためにすぐに行動しようと、安全に皆既日食を観察できる観測用メガネの無料配布を町教育委員会に陳情しました。その陳情は受け入れられ、幼稚園、小学校、中学校への観測用メガネの無料配布が決定しました。次世代を担う子どもたちにも一生の思い

出として、この観測が胸に刻まれることとなりました。

続いて女性部が取り組んだのは、観光ボランティアガイドの育成です。全国から訪れる観光客にどう対応するかを考えたいとき、観光ボランティアは欠かせないものでした。毎週月曜日に島の歴史を勉強し、町を案内しながら、観光客に島の特産品を味わってもらおう準備をしました。

この活動を通じて、町全体の動きも徐々に盛り上がり、多くの地域が旅行会社に業務を委託する中、喜界島では自分たちの手で観光客に対応しました。

**成功は、活動の積み重ね**

そしていよいよ7月22日、皆既日食当日を迎えました。他の島々が雨や天候不良に苦しむ中、喜界島では幸運にも黒い太陽が現れ、ダイヤモンドリングを観測することができました。太陽が隠れた瞬間には、あたり一面に暗闇と静寂が広がり、気温も下がり、一瞬恐怖を感じるほどでした。その後、現れた一筋の太陽の光。鳥はさえずり、水平線は茜色に染まりました。言葉ではとても言い尽くせないほどの感動を



皆既日食直前。空は薄暗く、見物客の期待が高まる

多くの人と共有できた瞬間でした。「皆既日食を体験した人は、もう一度皆既日食を体験したくなる」、そんな気持ちになりました。

講演会の企画から始まった商工会女性部の取り組みは、町役場、教育委員会、観光協会をつなぎ、見事皆既日食の日を盛り上げることができました。この活動が実を結んだのは、これまでのボランティア精神での地道な活動があったからこそです。

喜界島も過疎化、少子化、高齢化が進む島ですが、これからも地域に貢献する商工会女性部として活動していきたいと思えます。